

第一章 最も嘉(よし)とする陶徴君(とう ちようくん)

長安二(七〇三)年九月の未明。

東の空に月が鋭い弧を描く。そのわずかな明かりを頼りに、孟浩然は孟大の背を追う。

孟浩然は十五歳。一族で誰も適う者のいない堂々の体軀の孟大とは対照的に、小柄で華奢だ。盛り上がった肩を左右に揺らし大股で大地を踏む孟大に遅れを取るまいと、朝露に濡れた草に足を滑らせつつ懸命に歩む。

孟大の後に付いて行くのは常のこと。褚先生の学舎より、孟大の家にいる時間の方が長い。孟大の妻の楊義姉(ようねえさん)と、孟浩然の妹と二人で、あたかも三姉妹のようににぎやかなおしゃべりをする。孟浩然にとって何よりもそれが楽しい。

孟大の背は広く逞しい。自分も男児であるからにはこうでなければならぬだろう。いつまでも三姉妹でいられるものではない。だからこそ、今ならまだ許されると思いたい。

あたりが白み始め、山あいから流れ出る細い川に架かる丸太橋に達する。

ここで一息入れようと「ちよつと水でも飲むか」と孟大が振り返るのを期待する。

しかし、孟大はむしろ加速するかのようにとどしどしと橋を渡り、その先の坂をずんずんと登り始める。いつもなら後ろを歩く自分に細かく気配りしてくれるのに、今朝の孟大には突き放すような雰囲気がある。

道は林の中に入ってまた暗くなる。孟大のように軽やかには登れず、俯いて足を踏ん張るようにして進む。黒い地面ばかりを見ていると、夢の内に引き戻されて行くような感覚になる。

もう起きなければいけないのに、自分はまだ寢床にいる。孟大と約束した時刻はとっくに過ぎているのに、自分は夢の中で山を歩いている。孟大だけ

が行き、自分は行かない。自分はずっと夢の内にいる。

はっと顔を上げると、あたりの様子が変わっている。林の道のどこが変わったのだろうか。見回して、はっきりと示すことはできない。しかし、何かが変わった。何かではなく、風景の全てが新たに生まれ出たようだ。朝のこのときに、風景は一瞬ごとに夢から覚めてはまた覚めて新たになって行くのだろうか。

孟浩然は、山の道に心を奪われ、孟大からさらに遅れる。

不意に日が昇り、あたりが活気づく。林の隅々にまで種々の色が広がり、様々な方向から鳥の声が聞こえる。

こうしたことがここでは毎朝のように繰り返されているのか。知らずにこれまでいたのが口惜しい。夢は覚めれば消え、風景はすでに日中のいつもの姿になって、もとのところに留まれない。その口惜しさをいかにしたらよいのか。

孟大の妻の楊氏ならば、この光景に詩を作るかもしれない。楊義姉の真似

をしてみようかと思いついて、即座に打ち消す。自分は夢の中にいるのではない。三姉妹の遊びから離れなくてはならない。

詩を作るのは不得意ではない。いつも褚先生には褒められている。詩は貢挙の重要な課題であり、交際に欠かせぬ道具だ。褚先生は、学舎から立派な官人を送り出すには何が必要であるかを研究し、現在の宮廷で主流になっている詩風を弟子に教えている。それは南北朝時代の貴族たちの詩の流れを汲み、特に鮑謝（ほう しや）を規範とする。鮑謝とは鮑照（ほう しやう）と謝靈運（しゃ れいうん）の二人だ。そこに音律的な美しさを加味する。褚先生は弟子の詩を徹底的に添削する。孟浩然の詩は、他の弟子に比べると直される度合いは低いが、俗な字句、生硬な表現が、雅な字句、流麗な表現に改められ、音律も細かく整えられると、詩は見違えるばかりになる。それを拳拳服膺すべく家に持ち帰って読み返すと、自分なりに手を加えたいくなる。直し始めると、あちこち気になり、どこもかしこもがたがたして来て、ついには收拾がつかず墨で真黒に塗ってしまう。無残になった詩稿を見て、楊義姉は、「きち

んとできたものをわざと崩して、もっと上手に作ってやろうと巧むのでしよう。巧んだ上にまた巧むから、変なものになるばかり。しようがないこと。詩のようなものに心を入れ過ぎるのも、どのようなものでしょう」と笑う。楊義姉は、近頃では種々の蔭口を気にして、詩を作るのを自粛している。

孟浩然是、風景から自分を引き剥がすかのように、急に足を速めて孟大を追う。

孟大は、道が突き出した見晴らしのよい場所に立ち、早く来いと、手を振る。

ここに来たのには目的がある。山の道を楽しむためではない。孟大が待つ場所に行けば、避け難いことが自分の身に起こるだろう。それを求めて来た。そのことを思うと足が重くなる。これではいけないと、決然と歩いて、孟大の隣に立つ。

眼下に川がある。北から南へ流れる漢水だ。

水の上に、細やかなきらめきが揺れる。群鳥が舞い立ち、その翼にきらめきが及ぶ。川に向こうの河原の縁に木々が並ぶ。その葉に微かなきらめきがある。彼方に長い稜線を引く山がある。それを包む淡い朝霧にもきらめきがある。

孟浩然是再び景色に見入る。

「あれだ」。

孟大が言う。

ここに来た目的を、孟浩然是意識し直す。

孟大は太い腕を真直ぐに伸ばす。その彼方へと目を凝らすと、小さくぽつんと一艘の船があるようだ。

「あれなのですか」。

「罪人を送る旗印が見えて来る」。

川の流れに従って、船が近づく。朝の風光に捉われやすい心を、その船へ

と集中させる。

船との距離が縮むにつれ、あたりの景色がいままでとは異なる意味を持ち始める。

太古よりこの山とこの川はあった。今朝ここには、きらめきが満ちている。

このような朝が、太古の昔から無限の回数繰り返されて来たのだろう。過去のどの一回でもなく、自分はいまのこの一回に生きている。否応なしにこの瞬間だけに自分はいて、そこから抜け出せない。

船には孟大が言った通りの旗印がある。はつきりとそれが認められたとき、孟浩然の足が小さく震え出す。

書物に記された昔の出来事を読んでいるのではない。現在まさしく起こりつつあることをここで自分の目で見ている。それと自分とは無縁ではない。自分はここに立って眼下の風景を見ている。遠くから見るならば、船も自分も一つの風景の中にある。一艘の船の出現で、自分は現実が存在する風景の中に引っ張り出されたのだ。

これまでも夢の中で暮らしていたのではない。ただし、先祖が南園の地に作り上げてくれたものの内側にいただけだった。自分ほどに恵まれた人間はいないのだろうと、常々思ってた。書物を読めばそれはわかるし、楊義姉も「そなたはいまが一番幸せなのかも知れませんこと」とよく言う。人の世の厳然とした営みは止まることなく進行し、南園も自分もそれとは無縁ではない。至極当然のその事実を認識させるために船は出現したのか。

船には、流刑地へと向かう魏元忠が乗っている。現実がいかなるものであるかを、これ以上に雄弁に語るものはない。

魏元忠は秋に洛陽の獄に繋がれた。獄に下るのは三度目。今度ばかりは助かるまいと人々は思った。誰もが避けて来た禁忌に触れた。魏元忠でなければできないと人々は期待し、しかし、魏元忠でもあっても無理だろうと人々は危惧していた。

高齡に達した則天武后は一つの弱点をさらけ出した。若く美しい張易之（ちよう えきし）の虜になり、弟の張昌之（ちよう しょうし）にも心を奪われた。張兄弟への愛が何ものにも優先した。張兄弟は家柄がよく美しく伶俐者だった。ただ高潔ではなかった。則天武后の寵愛をよいことに、取り巻き連中とともに横暴に振る舞い、宰相以下の高官も、則天武后の血縁の者も、張兄弟の機嫌取りに奔走しなければならなかった。

魏元忠は二度目の流罪の後に都への帰還を許されたものの、則天武后の意にそぐわないところがあり、長らく国境地帯に置かれていた。しかし、魏元忠ほどの器量のある者は他にいないと則天武后は思い返し、都に呼び戻した。魏元忠は朝廷に復帰すると、張兄弟自身の幸福のためにも、兄弟を郷里に帰すよう則天武后に進言した。則天武后は愛を断ち切れなかった。

張兄弟は魏元忠を反逆罪で告発した。則天武后の面前で、張兄弟と魏元忠が対峙した。張兄弟は巧みな法廷戦術で魏元忠を破滅へと導いた。最後の決定的な証言者として張説（ちよう せつ）が呼ばれた。魏元忠にとどめを刺すと、

張説は張兄弟に約束していた。ところが、張説は則天武后の前に出ると、偽りの証言をするよう張兄弟から脅されたと陳述した。法廷は混乱し、則天武后は魏元忠は無罪であると知った。しかし、張兄弟を罰することはできなかつた。魏元忠と張説は南方へ流されることになった。

孟浩然の足の震えが大きくなる。

自分が生まれてからの十五年の間に、魏元忠は三度も死刑になりかけ、その度に南方に流された。自分は他でもなくこのような時代に生きている。そこに生まれ合わせた自分が何をすべきかは問うまでもない。

魏元忠が襄陽に昨日到着したことはすぐに南園にも聞こえて来た。国の命運は魏元忠とともにある。魏元忠の船を、この場所で見送ろうと、孟大と決めた。

船の上に幾つかの人の姿がある。魏元忠その人は見えない。それでも、遠

く離れたここに至るまで、魏元忠が乗っているからこそその緊迫感が伝わって来る。史書に読む昔の人物ではなく、魏元忠はいまここに生きている。

自分は何のために学問を習って来たのか。第一には貢挙に合格するため。貢挙を目指すのはその先の目的があるからだ。南園老がそれを掲げ、褚先生が共鳴した。孟子の教えを世に実践するのだ。

孟子の教えとは何か。孟子は人の本性は善だと言った。人が元来具えている善を、個から公へと押し広げて行くならば天下は自ずと安らかになる。武力によって天下を平定するのを霸道と言い、善によって天下を安らかにするのを王道と言う。孟子は、武をもって争う諸侯の間を巡って、王道を説いた。人々は迂遠な論だと笑った。孟子は、現実には役立つとされる全ての考えは一時的な弥縫策でしかなく、王道こそが最も確実な捷徑であると主張した。笑われても笑われても孟子は理想を説き続けた。決して屈することのない精神を、孟子は不動心と呼んだ。不動心は天地の間に漲る浩然の気によって養われる。

浩然の気とはいかなるものであるのか。朝日に見えていたきらめきがそれであったのか。いまの世において、不動心を有する者の一人が、船中の魏元忠であるのは間違いない。浩然の気があのきらめきであるのなら、魏元忠ただ一人がそれを享けるのではなく、自分も身の内に享けることができるはずだ。むしろ、孟子の子孫であって、なおかつ浩然をその名とする自分こそが、浩然の気によって不動心を養っていかなければならない。

孟浩然是空を見上げる。足の震えは止まっている。青い天より、明らかに浩然の気が我が身に降り注いで来ている。これを享けて、不動心を形作るのは、この世に自分が生まれたときにすでに課せられたことだったのだ。

そのように思いが定まると、再び船へと目を向ける。

船は静かに遠ざかる。南方の流刑地への旅はまだ始まったばかりだ。船がこの先進んで行く川の流れの彼方へと視線を移して行くと、孟浩然の心はたちまち穏やかでなくなる。

魏元忠に続かねばならない。三度目となる今回の流罪も含めて、魏元忠は

都と辺境の地をしばしば往復して来た。自分はまた南園から出たことがない。先祖が南園の地に築いてきてくれたもののお陰で、これまで何不自由なく生きて来た。自分は学問だけをしていればよかった。三姉妹のおしゃべりこそが最も楽しいと思う自分が、どうして魏元忠のようになれようか。

心を強くしなければならぬ。再び空を見上げると、茫漠として捉えどころのない空間が広がっている。このどこに浩然の気があるのだろうか。

魏元忠の船は、遠景に溶け込むようにして消える。魏元忠の船がこのすぐ下にあつたときには、自分も魏元忠に続くことができると思えた。魏元忠がここにいるときだけだった。浩然の気なるものは、いまの時代には、ただ魏元忠の身のみ集まっているということなのか。

また震えそうになる足をぐいと手で押さえ、自分は孟子の子孫、その名も浩然、自分こそが不動心を持たなければならぬと、先ほどの決意を繰り返す。

「剣を習いたいと思います」。

この瞬間に思い付いたことを口より出す。自分の声を聞いて、すでに確信に変わる。そうだ剣を習って心を強くするのだ。

南園の孟一族は、南園老がそうであったように、かつては武にも優れていた。千年の長きにわたって一族を守るには武が必要だった。楮先生も弓術に秀でる。しかし、弟子には貢挙への最短の道を歩ませるとして、学問ばかりを教えている。

孟大の大きな手が孟浩然の肩に置かれる。

「そうか。君はそう考えたのか」。

孟大はもう一方の手で目のあたりを拭う。

船にすっかり気を奪われていた。孟大はどうしていたのか。

「兄さんはどう考えられたのですか」。

孟大は顔をそむけ、孟浩然の肩を押しやり、

「魏元忠様は南方に行かれた。それでどう思ったのかと、君は聞くのかい」。うなずく孟浩然は、ぐいともうひと押しされ、その力によるめく。

「行くぞ」。

孟大は猛然と駆け出す。

虚を突かれて呆然としている間に、孟大の背が見えなくなる。このままではいけないと、孟浩然も動き始める。孟大の速さには及ぶべくもないが、この先も一本道だ。とにかく追って行く。

林を抜け出した瞬間に、嫌な予感に襲われる。

この先に切り立った崖がある。孟大がそこから飛び降りるのではないかと、妙なことを想像する。どうして孟大が飛び降りるのか。理由は全くわからない。けれども、あり得なくはないような気もする。

岩場の突端に孟大の後ろ姿がある。その向こうは青空だ。孟浩然は立ち止まる。うっかり近寄ると、孟大がひらりと身を投じてしまうのではないか。そのようにして仙界に昇った者が大勢いる。人間の肉体は落ちて崖の下に碎

かれた亡骸が残る。それは単なる抜け殻にすぎない。本当の身は仙界へと昇り、永遠に生きるのだ。どうして孟大が仙界に行こうとするのか。理由は全くわからないけれども、あり得そうな気がする。

孟大には楊氏がいる。止めなければならぬ。孟浩然は、岩場へと踏み出した瞬間に、虚空に飛び出たいのは、実は自分なのだと気付く。魏元忠に続こうとの決心を置き去りにして仙界に行けるのなら、それはすばらしく望ましい。

孟浩然の足はすでに踏み場を失い、岩場のあちこちに亀裂が走り、どことも知れぬところを飛翔していると感ずる。

孟大が嘯く。

孟浩然はかろうじて大地の片隅に留まる。孟大の嘯きは細く長く、そして次第に言葉に変わる。しばらく抑揚だけが響き、ようやく一語を捉えられると、意味のある言葉になる。

暖暖遠人村　ぼんやりと遠くにかすむ村

依依墟里煙　　ゆらゆらと昇る人家の煙。

孟大は陶淵明（とう えんめい）の詩を吟じている。

孟浩然の胸が強く締め付けられる。そうか、この世の全ては、この句に及ばない。

陶淵明は官職を投げ出して故郷に帰り、村の風光をこのように歌った。陶淵明のこの句を読むと、孟浩然もまた長い苦難の日々から帰って来たような安堵感を覚える。ならば初めから故郷にいればよい。

孟浩然是直ちにその考えを打ち消そうとする。自分はまだ南園の外に出ていない。初めから安堵ばかりを求めてよいものか。

崖から飛び出て仙界に昇る誘惑と、陶淵明の詩の誘惑と、どちらが危険なのか。剣を習うと決めたばかりではないか。

詩を吟じ続ける孟大の後ろに孟浩然是立つ。

久在樊籠裏　　長らく鳥籠の中にあっただけれども

復得返自然　　自ずから然るべきところに帰って来られました。

孟大の声が遠く空に吸い込まれて消える。

孟大は以前から陶淵明に傾倒している。数年前に、孟大の部屋で『高士伝』を読んだ。褚先生の学舎にはない書物だ。晋の時代の皇甫謐（こうほ ひつ）が九十六人の高節の者を選んで小伝を記したもので、拾い読みする中で、最も強い印象を受けたのが陶淵明だった。孟大にそのことを告げると、「まだ君には早過ぎるな」と言いつつも、陶淵明の詩のいくつかを教えてくれた。

「見たまえ。あそこに我等の南園がある」。

孟大が腕を差し延べる先に、孟一族が数百年にわたって営々と耕して来た土地がある。そこを未明に出たばかりであるのに、言いようのない懐かしさを覚える。

そこでは、季節ごとに日を決めて大切な農事を総出で行っている。学舎は休みになり、褚先生も弟子と連れ立って園田に出る。今年の春には苗を植えて桑畑を広げた。期待通りに成長した桑の列がここからも見える。土地を深く起こして畦を作り、よい土を入れて苗を挿し、水を灌いだ。早朝から夕刻

まで、力を尽くして成し遂げねばならぬ労役も、大勢で賑やかに行えば楽しい。無事に完了した後、ささやかながらも酒食が振る舞われた。

半年前のことが遠い昔のように思い出される。南園は地上にあそこだけにある唯一の場所だ。自分は恵まれすぎている。

孟大は言う。

「君は、どう考えたのかと俺に尋ねた。俺はもう迷わないと決めた。そうできるかどうかの自信はいまはない。しかし、それでも決めた」。

孟大の声の響きに、孟浩然是、自分が早まったことを言ってしまったと感じる。孟大の背に付いて行くのが自分ではないのか。

孟大は続ける。

「陶淵明は官を辞して、故郷の園田を詩に歌った。陶淵明以前にその地を詩に詠んだ者はいなかった。陶淵明の詩によって、その園田は永遠に残るものとなった。詩を詠んだのは陶淵明であつたけれども、園田は陶淵明に至るまでの大勢の人々の営みがあつてそこに存在した。陶淵明が世を去つてからも

その園田の風光はいまも残り続けているだろう。大勢の人々の営みはその地で続いている」。

「兄さんはこの土地を離れないと決めたのですか」。

「俺は迷っていた。魏元忠様を見送って、俺の気持ちは、予想していたとは逆に定まった」。

孟浩然は動揺し、言ったことを打ち消したくなった。かろうじて口には出さない。孟大の心が定まったのなら、自分も決して変えない。それがいい。しかし、そう思っても、腹を焦がすような違和感が生じる。

孟大は貢挙をこれ以上は受けず、南園に生きると決めたのだろう。孟大に官服は似合わない。妻の楊氏にとっても、孟大の決心はよいに違いない。孟大と楊氏の夫婦はいまのままであってほしい。

楊義姉は南園の誰もが及ばない才能を持ちながら、虚しいことのために自身を消耗させている。近頃では、楊家に追い返してしまえとの声さえ出ている。それも小さな声ではなく、飛び切り大きな声でだ。「南園に来て、一人の

子も産まないのでは、いくら難しい本が読めても、気取った詩が作れても、何の意味もない。一番の役立たずと同じだ」。露骨な上にも露骨に言うのは、南園の主である孟漲の甥の孟振（もうしん）の妻の霍（かく）氏だ。霍氏は図体が大きく、それに見合っただけで態度も大きく、孟浩然たちの間では大叔母と呼んでいる。楊義姉はとんと子宝に恵まれず、南園ではとかくそれが話題にされ、義姉の才を妬んだ蔭口が絶えない。霍大叔母の方は、孟浩然と同世代の男児を幾人も産んだのに、誰も字舎通いを許されなかったこともあって、かねてから不平を募らせている。孟大はもつと妻を守らなければいけない。

「兄さんの気持ち私が僕はわかっていませんでした」。

「俺がわかっていなかったのだから、君がわかるのは無理だ」。

孟大は突き放すように言う。

「兄さんと一緒でいたいのです」。

孟浩然は思わず言ってしまう。

孟大は応じず、再び坂を登り出す。

孟浩然是後ろに従う。孟大の背の後にいつもこうして付いていたいと強く思う。だが、孟大は追いつけぬ速さで行ってしまふ。

岷山の山頂近くに小さな楼台がある。

岷山は襄陽の町の東南九里にある。近傍にはより高い山があつても、岷山山頂からの眺めが襄陽随一とされる。襄陽を訪れてその絶景を見ずに去つてはならぬと言われ、楼台の下で送別の宴がしばしば張られる。

孟大は、楼台の傍らの石碑の前で、腕を組んで突っ立っている。

その碑文を読む者は必ず涙を落とすことから「墮涙碑」(だるいひ)と呼ばれる。羊祜がここで「宇宙有りてより、すなわち此の山有り」と嘆じた事歴が刻まれる。

孟浩然が追いつくと、孟大は、墮涙碑にある「皆堙滅無聞」の部分に手を触れつつ猛然と話し出す。

「俺はずっと迷っていた。俺は南園老の最初の曾孫として生まれた。そうでなければこれほどの迷いはなくすんだ。俺が生まれると、南園老は方々に尋ね、この人こそはと、楮先生をお招きした。俺は楮先生の一番弟子になった。俺の道はとつくに定まっていた。俺に迷いは許されなかった。しかし、ずっと迷っていた」。

孟大の背がいままでとは違つて見えて来る。

「迷っているのは辛い。迷いを超えたいと思つていた。そもそも迷いは許されない。俺の道は定まっている。俺は迷いを払拭しなければならなかった。今朝、魏元忠様の舟をお見送りして、ようやく決心がついた。俺は決心した。だから、もう迷わない。そうできるかどうかの自信はいまはないけれども、そのことももう言わない。いいか、俺はもう迷わないと決めた。君は君で、魏元忠様の舟をお見送りして一つの決意をしたようだ。俺はそれを聞いたよ。うな気がするが、聞いていなかったかもしれない。迷っているのは辛い。俺だけが、その辛さから逃れてしまつてはずるいと思うかい。恨まれても構わ

ない。それで、この際だから、君に一つ言っておこう思う」。

孟大は、これまでに見たことのない顔で振り返る。

「何でしょうか」。

「いいかい、これからは間違っても俺に付いて来ようとするな。俺は俺、君は君だ。俺の背中をもう見てはならない」。

孟大の声は現実にあるものではないような気がする。まだ夜明け前の夢の中にいるのだろうか。そうなら、先ほどの決意も夢の中の出来事だ。

孟大はすつと表情を緩め、墮涙碑の方に向き直る。

「襄陽には、その昔、この碑に記される羊祜がいて、そのまた昔に龐徳公（ほうとくこう）がいた。二人の生き方は大きく相反するものだった。だが、心の底には同じものがあつたと俺は思っている。同じものがあつても、一人の男は一つの生き方しかできない。羊祜が羊祜として生きるならば龐徳公にはなれず、龐徳公が龐徳公として生きるならば羊祜にはなれない。俺はまことにちやちな男だ。羊祜にも龐徳公にもなれるべくもない。俺は俺で決めなければ

ならなかった」。

龐徳公は諸葛亮とほぼ同じ時代を生きた。諸葛亮は襄陽の西に住み、龐徳公は魚梁洲（ぎよりょうしゅう）に住んでいたとも峴山の南に住んでいたともいわれる。

龐徳公は妻と互いに賓客に対するかのように礼儀正しく接し合っていた。龐徳公と交わりを結びたいと思う者は大勢いたが、龐徳公は襄陽の町に足を踏み入れようとしなかった。当時、強盛になりつつあった劉表は、龐徳公を参謀に招こうとした。幾人もの使者を送っても全く応じないので、劉表は自ら出向き、「一身を保全するのと、天下を保全するのと、どちらがより大切なお仕事でありましょうか」と尋ねた。龐徳公は答えた。「鴻や鵠の巢は高林の上であり、日の暮れ方にそこにすみかを得ます。鼯（げん）や鼯（だ）の穴は深い淵の底にあり、夕べにそこに宿を得ます。仕官するか隠遁するかは、巢か穴を求めるだけのことです。それぞれにすみかや宿を得ればよろしいので、私は天下を保つなど考えもしません」。龐徳公は、劉表の出現で中断させられ

ていた野良仕事を再開した。妻と子は傍らでずっと草むしりを続けていた。劉表はなお龐徳公の脇に立ち、「先生は畑でこのように御苦勞されていて、官に就いて禄を得ようとなさいません。それで子孫のために何をお遺しになるのでしょうか」。「世人が遺そうとするものは危うく、私が遺そうとするものは安らかです。遺すところは同じではなくても、遺すものがないわけではありません」。龐徳公はそれ以上は全く取り合わず、劉表は嘆息して去った。龐徳公は後に仙菓を採るために妻子を連れて鹿門山に入り、それきり帰って来なかつた。

孟大は再び隨淚碑の同じ部分に触れて読み上げる。

由来賢達勝士

そのときから大勢の賢達、勝士が

登此処遠望者多矣

ここに登つて遠く望んだけれども

皆埋滅無聞

皆消えてしまつて聞くところがない。

岩場で陶淵明の詩を朗唱したときと違つて、孟大の声は重くくぐもつてい

孟大は墮涙碑に一礼し、楼台を登る。孟浩然も続く。見てはならないと言われた孟大の背に付いて行く。

最上階の欄干に孟大は手を置き、

「皆が消えてしまったのだから、初めからなくてもよくはないのか」。

孟大がつぶやく。

孟浩然は黙って脇に立つ。

「それでも、宇宙はあり、岷山はあり、この楼台はあり、人はいる。宇宙が始まってからどれほど経ったのか。岷山にどれほどの人が登ったのか。宇宙が始まってからの長い長い時に比べたら、ずっと最近になって、この楼台は建てられた。それでも、この場に立った者は数えきれないほど多い。その一人の声でもいいから、いまここで聞くことができるのか。宇宙が始まってから、この山はここにあったのか。山は何のためにあったのか。何のために人はここに登ったのか。ここで悲しむためなのか。俺たちもまたここに来ているま悲しんでいるのか。俺たちのいまのこの思いを、次にここに来た者が知る

ことはない。それなのに、人はどうしてここで悲しむのか。君はその訳を知っているかい」。

孟浩然は答えられない。

「何も考えるところがないのかい。どうなんだい」。

孟大は今朝は初めから普段と違っている。

孟浩然是、冷たい風が足の下から吹き上がって来るのを感じる。その風によつてどこかにさらわれてしまふそうだ。欄干に乗せた手に力が入る。先ほどは浩然の気が天地の間に充満すると見えたが、いまは天地の間には寒々しい虚空があるだけだ。

「君はどうなんだい」。

孟大がまた言う。

孟浩然是やむをえず答える。

「悠々たる自然に向かうと、人の世のあまりのはかなさを思うよりないからなのでしょう」。

凡庸な答えだ。

「君は本当にそう思っているのかい。それだったら何も難しくない。その程度の理由だとわかっていれば、大して悲しくない。君はその答えを誰かに教わったのかい」。

「自分でいま思っただけです」。

「そうなのかい。君は自分で思っただのかい」。

「違うのかもしれない」。

「俺はわからない。悲しみの訳が俺にはわからない。だから、こう思う。悲しみの因って来たるところのものが何であるのかがわからないから悲しいのだと。そうではないかい。羊祜一人の悲しみではなく万人の悲しみであるのは、その訳がわからぬものだからではないのかい。だから万古不易なのだろう。羊祜は悲しみを抱きつつも、現世において為さねばならないことがあると考え、天下統一の事業に身を捧げた。それは、羊祜が生きている時代においてのみ意味のあることで、万古不易とはいえない。現世において名を挙げ、

後世にも名を残すだろうけれど、そんな名など、この岷山のように宇宙の初めから聳え続ける存在ではなく、所詮は、あの漢水の流れに浮く泡と同じだ。しかし、いいかい、現実に生きる者に、その時においてしなければならぬものの他に何があるのだろうか。一体何があるのか。言っていることはわかるだろう」。

孟大が苛立つのを孟浩然は初めて見た。

「わからないのかい。わからなくていい。俺もわかっていない。だから、決心する必要があった。迷うのはこれで終わりだ。いいか、見てくれ、龐徳公が住んでいたのはあそこだ」。

孟大は北側の欄干へと移り、腕を差し伸ばして襄陽の町を示してから、漢水の流れを東に辿って、川が南に向きを変え、る場所に浮かぶ魚梁洲に向ける。「大水が出れば消えてしまうあの洲に、龐徳公は本当に住んでいたのか。だからこそ龐徳公の住まいにふさわしいのか。魏元忠様は、今朝、あの洲の脇を通った。そのときに、龐徳公のことを思っただろうか。君はどう思うか」。

孟大の話は次々に飛躍する。

孟大は腕を伸ばしたまま、孟浩然が答えるのを待ち続けている。仕方なく、「魏元忠様にも、龐徳公のように隠棲されるお望みがあつたでしょうか。魏元忠様はお父上を早くに亡くされ、貧窮の中で勉学に励まれたと聞きます。お若いころから強固な意志を貫かれて来たお方です。魚梁洲の脇を通つても、特別な思いはなかつたでありますよ。」

これも凡庸な答えだ。それに対して孟大が何か違うことを言つてくれるのを期待する。

「そうか、君はそう考えるのか。魏元忠様はまことに立派なお方だ。信義を重んじ、天下のために身を捧げようとする者は魏元忠様の後に続かなくてはならない。魏元忠様に隠棲の望みがあつては困る。だが、魏元忠様は立派だからこそ、魚梁洲の横を通つたときに、深く龐徳公のことを思い、悲しみに襲われたのではないかと、俺は考えたい。それがいかなる悲しさであつたのか、魏元忠様にもわからぬものであつたのだろう。」

孟浩然は堪らずに尋ねる。

「兄さんは、結局、羊祜ではなく龐徳公を選ぶとお決めになったのですか」。「そのどちらでもないと言ったではないか。南園老は、我等一族から官人を出すのを望んだ。官途に就くのは立派なことだ。我等の遠い先祖である孟子の教えを世に広く実践するには官人にならなければいけない。それはわかっている。南園老は子孫に立派な仕事をさせようと考えた。つまりは、羊祜に近づくのを望んだ。龐徳公は世を治める才があり、人々に囑望されながらも、世から逃れ山に隠れ棲んだ。南園老は子孫がそのようにするのを望んでいなかった。俺が決めたのは、南園老に逆らい、南園老よりも前の我等の先祖のようになるということだ。昔の先祖となると、子孫の我等でさえ、その名をはっきりとは知っていない。格別なことをした者はいなかった。それでも、誰もがそれぞれに立派だったと俺は思う。羊祜のように世に顕れずとも、龐徳公のように世から逃れずとも、土を耕して死んだ我等の先祖は十分に立派だったと俺は思う。俺もそうすると決めた。俺の考えは間違っていないと俺

は思う。正しい。しかし、正しいのは、俺以外の者に限ってなのだ」。

孟大は声をぐっと沈め、

「俺は違う、俺には迷いは許されない。俺は他の者とは違う。南園老が皆を集めて取り決めた後で最初に生まれたのがこの俺だ。孟子から一千年の時を経て、天下のために生きる人間を世に送り出そうと決め、そこに俺が生まれた。俺は、一つの定めを担ってこの世に生まれ出た。先祖と同じようになろうとしても、俺に限ってはいけないのだ」。

「兄さんだけに限ることではありません。僕だって同じではありませんか」。

孟大は嘆息し、孟浩然の肩に手を置く。

「魏元忠様の舟を見送ろうと、昨日、君を誘った。俺が本来やらなければいけないことに、きっぱりと立ち戻れるのではないかと、心の内で半ば思っていた。半ばだけだ。舟を見送り、その半ばだけの方になったならば、それを君に伝え、君を安心させたいと思っていた。半ばだと思っていたのだけれども、本当のところは、半ばどころではなく、少しもなかった。俺は、孟子か

らの一千年の間に生きていた人々と同じになろうと決めた。もとよりそれしかなかった」。

「それは、陶淵明に習うということですか」。

孟大はその広い胸を叩き、

「この俺はもう三十だ。この年齢になれば、自分がいかなる者であるのか見極めがつく。俺は君に詫びる。すまない」。

孟大は欄干から身を離し、衣服を正して深々と頭を下げる。

「何をなさるのですか」。

「謝ったところで何もならないのはわかっている。しかし、謝らずにはいられない。俺は逃げる。俺の決意とは畢竟そういうことだ。陶淵明に習うのかと君は言う。つまりは、義皇（ぎこう）の人たらんことを望むのかということか。南園の先祖あるいは義皇の人に近かったのか」。

義皇とは太古の帝王だ。まだ国といえるようなものはなく、帝王といっても農夫とさほど変わりがなかった。陶淵明は義皇の人になるのを望んだ。

「兄さんは決して逃げるものではありません。龐徳公は、世人が遺そうとするものは危うく、自分が遺そうとするものは安らかだと言いました。兄さんは、千年続いた先祖と同じく、安らかなものを遺すために、これから力を尽くそうとされるのでしょうか。陶淵明が役人を辞めて郷里に帰ることができたのは、さつき兄さんが言ったように、陶淵明以前の先祖が、やはり安らかなものを遺しておいてくれたからではないのですか」。

「もう言うな。舟を見送りに来たのは、俺にとっても、君にとっても、間違いであったのかもしれない。俺が逃げれば、次には四郎君がいて、その次に君がいる。順番としてそうなっている。君にすまない」。

南園老は曾孫の運命を定めた。才能が認められなかった者は褚先生の学舎に入れてもらえずに惨めな思いをしたが、その反面、重責を免れた。一族挙げての期待を身に負うのは生易しいものではない。

孟大は、都で行われる貢挙の本試験、すなわち省試を受ける資格を獲得できていない。地方の州県の長は、冬の中頃に、春の本試験を受ける者を都に

送り出す。それに選ばれた者を郷貢（きょうこう）という。郷貢を選抜する予備試験は解試といい、襄陽でのそれに合格するのは、ほとんどが町の有力者の子弟だ。合否は、予備試験でも本試験でも、答案の出来栄だけで決まるのではない。試験を執り行う者が合格させたいと思う者が合格しやすいようになってきている。とりわけ、解試の首席合格者である解頭、省試の首席合格者である状元（じょうげん）になる者は、事前の評判が肝要である。南園老の時代であれば、南園の嫡男が郷貢の選から漏れることはなかったであろう。南園の力がたとえ落ちても、孟大が抜群の成績を挙げればいいのだろうが、実力を問われると及ばないところがある。貢挙にはいくつかの科があり、有力官僚になるには進士科を合格する必要があるのだが、進士科で重要視されるのは詩賦の才で、孟大はそれを苦手としている。

「順番がどうだとか、そんなことは、僕は考えていません」。

「四郎君のあの一途さは、必ず四郎君を成功に導くと、俺は思っている。しかし、痛々しくもある」。

孟大はふうっと大きく息を吐いて横を向き、

「逃げる俺が、人のことを、言つてどうするのだ。ばかばかしい」。

順番は、孟大、孟四、そして自分で終わるのではない。同年の孟七すなわち孟馨もいるし、八歳下の孟十五すなわち弟の孟洗然もいるし、去年生まれただばかりの孟二十二すなわち孟邕に至るまで、大勢の者がいる。

「僕だつてもう十五歳です。自分のことは自分でわかります。剣を習うと、僕は言いました。決意したのです」。

「そうか、聞こえなかった気がしたけれど、さっきはどうやらそう言ったのか」。

孟大は小さくつぶやく。

孟浩然はぐっと胸を張り、

「魏元忠様は天下の期待を一身に集めて闘つて来ました。魏元忠様お一人ではないはずがありません。僕のような者でもその後が続こうとしていると、天下に示さなければなりません。一人が二人になり、二人が三人になって、天

下はきつと変わります。魏元忠様も一人の男、僕も一人の男です。後に続けぬはずがありません」。

「君は剣を習うと決めた。それでよい。迷うのは辛い。辛いけれど、迷っていない。俺は迷うのを止めた。しかし、君でも四郎君でも誰か他の者が迷うのならば、俺はそれをきつと支える。俺はそれをここで誓う」。

今日の孟大はよくわからないことを言う。とにかく孟大を安心させようと、「僕は剣を習って心を鍛えるのです。強い心を持てば、兄さんに心配をかけるようなこともなくなります」。

孟大はしばらく間を置き、

「わかった」

と、孟浩然の方に向き直る。

孟浩然は敢えて孟大を見ずに、天を仰ぐ。

この天地の間に充滿する浩然の気は必ずある。あのときはそれが自分の身を包んだ。それは一瞬のことであつたけれど、確かにあの一瞬はあつた。そ

ここに自分の一生を託してよい真実があるに違いない。
孟浩然はことさらにそのように考える。

■ 仲夏帰漢南園寄京邑旧游

最初の上京の後の長い旅から帰った夏の詩。時に四十四歳。郷里に生
きる思いを詩に詠んで都の旧知の人々に寄せた。

嘗読高士伝 かつて『高士伝』を読んで

最嘉陶徴君 陶徴君（陶淵明）が最もよいと感じました。

日睹田園趣 陶淵明は日々に田園の趣きて見ては

自謂羲皇人 自分は羲皇の人であろうかと言っていました。

余復何為者 では私は何をする者なのでしょうか

◎◎徒問津 我が行く手に通じる渡し場の位置をおたおたと問うので

す。

中年廢丘壑

中年になつて故郷を離れ

十上旅風塵

官に仕えようと風塵を旅しました。

忠欲事明主

忠としては、明主のためにし

孝思侍老親

孝としては、老親のためにしようと思いました。

帰来当炎夏

その旅から帰り来たのは夏の盛りで

耕稼不及春

耕すべき時季の春には間に合いませんでした。

扇枕北窓下

北の窓辺で扇を使いつつ昼寝をし

採芝南澗浜

南の川のほとりで薬草を採っています。

因声謝同列

都の皆様はこの詩をもつて御挨拶いたします

吾慕潁陽真

天下を譲るといわれても受けなかつた人の心の真実を慕

う私です。

■ 山中逢道士雲公

四十代後半から晩年の作か。南園近傍の山中で道士の雲公に逢った。

雲公には荆山（けいざん）先生の綽名もあつた。荆山は襄州の西北八十里にある。

春余草木繁

春も終わりとなれば草木が繁り

耕種満田園

田園はどこも耕されて種が蒔かれましたので

酌酒聊自勸

私もいささか酒を酌んで

農夫安与言

農夫と安らかに語り合っていますと

忽聞荆山子

ふと聞きましたのは、荆山先生が

時出桃花源

このごろは桃花源を出て

採樵過北谷

北谷のあたりで薪を採り

売薬来西村

西村に薬を売りに来ておられるとか。

村烟日云西

山に行ってみますと、村が煙つて、日が西に傾くころに

榛路有帰客

林の路を帰って行く人がいましたから

杖策前相逢

杖を止めてその前に出ますと

依然是疇昔

昔のまま荆山先生でありました。

邂逅歡觀止

殷勤叙離隔

謂予搏扶桑

輕拳振六翮

奈何偶昌運

獨見遺草沢

既笑接輿狂

仍憐孔丘厄

物情趨勢利

吾道貴閑寂

偃息西山下

門庭罕人迹

何時還清溪

從爾鍊丹液

久しぶりの出会いを歡び

丁寧に無沙汰の挨拶をしましたところ、

先生がおっしゃるには、「おやおや、東方に出て

高く軽やかに飛んでおられるかと思っておりましたのに

この隆盛の世の中に、どうして

この田舎にとり遺されているのですかな。

古の隱者の接輿がわざわざ狂を装ったのも笑えますが

孔子が旅で御難に遭ったのもなかなか憐れですな。

世の中はどうしたって権勢と財利に走るものです

私などは閑寂をこそ貴んで

西山の下でひっそりと息をしているだけですから

訪れて来る人もまれでせいせいしています」。

「いつか私も清らかな溪に帰れるのならば

先生に教わって不老長生の薬を鍊りたいものです」。

■ 峴山送張去非游巴東

いつの作か不明。張去非（ちょう きょひ）という人が巴東に旅するのを
峴山において送った詩。

峴山南廓外

峴山は襄陽の町の南の外にあり

送別毎登臨

送別のたびに登臨します。

沙岸江村近

沙の岸、江べりの村が近くに見え

松門山寺深

松の門、山の寺が奥深くにあります。

一言余有贈

一言を私はここに贈り

三峽爾將尋

三峽を君はこれから尋ねます。

祖席宜城酒

別れの宴には宜城の名酒があり

征途雲夢林

旅の途には雲夢の林があります。

蹉跎游子意

旅行く君の心は重く

眷恋故人心

見送る私の心にはなお未練があります。

去矣勿淹滞
巴東猿夜吟

さあ、ぐずぐずせずに行きたまえ
巴東のあたりでは、夜、猿が悲しく吟じることでしょう。